

崔 恩瑛 (チェ ウンヨン)

韓国出身

上智大学 文学部文学研究科新聞学専攻 修士課程

変化と成長と使命感

「変化」は「新しさ」「希望」「革新」など前向きという言葉と組み合わせる時が多いが、「陣痛」とも伴うと思います。

例えばこの何年間コロナをあげられます。

コロナの影響により世界多くの人が家族と強制的に別れ、生活環境の強制的な変化を迎えました。多くの会社は在宅での仕事を進め、東京の朝出勤ラッシュもコロナ以前と比べると昔ほどひどくないです。

コロナ時代に住んでいる日本の外国人留学生の私もその波に巻き込まれてしまいました。学校授業は全てオンライン授業に、最後の修士論文発表までもオミクロン株の感染拡大によりオンラインになりました。

この2年間、私にとって最大の問題はアルバイトの人員削減の対象になり生活困難にさらに学費が支払えない苦境にまで追い込まれてしまったことです。

しかしながら、アルバイトをしなくなってから見えるものも少なくなかったです。

まずは、自分が来日して今までの時間に対しての反省です。

日本に来て10年間、自分は学費と生活費を自分で解決するために、アルバイトを法定制限の最大限まで増やして自分が何をしたいのか、何を求めているのかを考える時間がなかったです。

コロナに「貰った時間」はこの問題について再考する時間にもなり、自分を理解する時間になりました。

また、この問題への認知から問題存在の確認にとどまらず、どうしたら今の困窮から離れもっと有

益な時間を過ごせるのかを考えて行動した結果、財団の皆さんとの出会いになりました。

財団生としての期間、来日前から進めたかった脱北者問題を研究することができました。

脱北者は、北朝鮮を脱出した北朝鮮住民を指しますが、中国を通じて一般的には韓国、もしくは第3国に避難します。

現在統計が公表され最も多いのは韓国で2022年時点では30000人超えの脱北者が在住しています。

しかし、海外の新聞メディアは、韓国よりも中国にもっと多く30万人以上の脱北者がいると予想しています。

問題は、北朝鮮と中国には不法入国者を総合的に強制送還する規定を作り、脱北者もその対象になっています。北朝鮮に強制送還された脱北者は、強制労働所に監禁されることも公開処刑されることもあり、その家族も連帯責任に全員公務員職の剥奪までしています。

自分が生まれたのが、中国と北朝鮮の国境線地域で、冷戦直後の食糧難時期の95年の北朝鮮親戚への援助もその後の自分の父親の脱北援助も目で見ながら育ちました。

中国では法律に妨げることはありませんが、父親及び家族の行動に自分も賛成し、今後自分も違う形で、脱北者問題に関わる仕事をしたいと思いました。

脱北者問題が重要であると思う理由は、現在2022年1月末に中国で注目を浴びた婦女人身売買の問題の最大の被害者が脱北者であるからであります。

上記で、中国で脱北者を北朝鮮に強制送還の話をしました。中国内で中国公安に捕まえずに韓国など第3国に渡るために脱北者は被害を受

けてもどこでも話せない立場であります。韓国に渡った脱北者インタビューでも大多数が、自分が人身売買された経験があるか人身売買された知り合いがいると言っています。

さらに、近年には医療技術の発達により臓器売買が闇市場で盛況ですが、その中で脱北者のような不法入国者として権利が守れない人々がその被害を受けやすいと思います。

この問題は、人権、難民問題と思えがちですが、その根本的理由は冷戦後の世界情勢の変化と新共産主義陣営と資本主義陣営の成立によるものが大きく、最近が二つの陣営の対立が深まるにつれ、脱北者問題がさらに注目を浴びています。

自分は、このような流れを新聞テキスト分析と記事、報道のデータ化によって分析し、少しでも脱北者の力になりたいです。

博士前期過程では大きい成果を出してはませんが、新聞のデータ分析とテキスト分析により、日本社会における脱北者についての理解を深めることも、複雑微妙な関係と感情を確認できました。特に日本に在住する脱北者の日本人妻と後の家族への政府の動きと中国国内での民間団体への協力は興味深いところでもありました。

4 月から始まる博士後期課程では、博士前期過程での研究を引き継ぎ、脱北者問題を中心に国際関係、人権問題も合わせて詳細に日本の脱北者報道と韓国、カナダなど諸外国の脱北者報道の比較分析に加え、インタビューも進めていきます。

人々は生活環境によって、見えることもやるべきことも決めると思いますが、私にとって脱北者問題は生まれてから常に横に存在した隣人でもあり、友人でも、家族でもあります。脱北者研究を進めることで脱北者支援にと止まらず今後は、大学での授業と現場での活動を通じて、問題所在をより多くの人に知らせて脱北者支援目的を果たしたいです。

中国には「塞翁失馬」の諺があるように、コロナ禍によってアルバイトの人員削減対象になって、自

分の過去を反省する時間ができて、財団生になり、皆さんの応援を受け自分が使命感を感じる脱北者問題に取り組めるようになって、さらに今後も進められるというのはコロナ禍の前は考えることもできなかった遠い夢のような話でしたが、今年の 4 月からその一歩が出せるようになりました。

「変化」は「痛い」時もありますが、それにどう向き合うかによってどれほどで成長できるかが決まると思います。

以上